

の緩斜面では、桑園が多いと言える。

以上の分析の総合的な結果として、農業集落区分を行った。(図参照)

＊ 1970年国勢調査

A：下位段丘立地集落

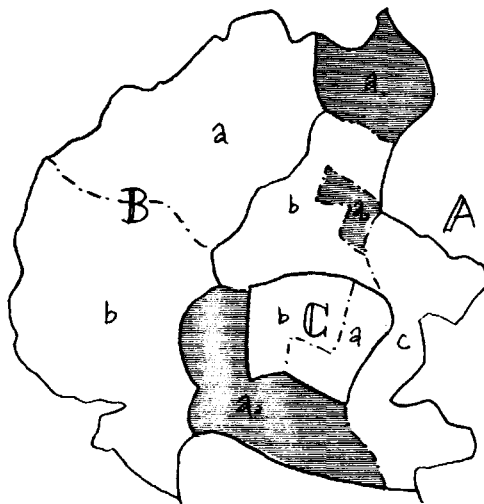
- a 水田卓越集落
- b 桑にも少し依存
- c " (富士川東岸)

B：山間の緩傾斜地立地集落

- a 稲作をある程度行うが桑へ依存度大
- b 稲作をほとんど行わず桑へほとんど依存

C：山腹緩斜面立地集落（烏森山周辺）

- a 畑地率高い
- b 桑が多い



農業集落区分図

烏海山麓の開拓地に関する地理学的研究

清水 明子

烏海山は、秋田県と山形県にまたがる標高2,237 mの火山である。この烏海山の100 mから400 m位の高さの所には、戦後に入植した開拓地が30部落ほどある。

これらの開拓地に入植したのは、敗戦のために職を失った軍人・工員や、外地からの引揚げ者、地元農家の二・三男たちであった。開墾は、鍬を使って人力で進められた。最初のころは、自給自足のため、大豆・小豆・陸稲・ばれいしょなど、どこの開拓地でも似たような作物を作っていた。ところが30年ほどたった現在では、酪農専門の所、水田の多い所、兼業が主で農業は盛んでない所など、部落ごとに個性が出てきている。

秋田県由利町の南由利原は、入植後の離農者が多かった開拓地である。現在では農家戸数11戸で、酪農中心にある程度安定してきてはいるが、それぞれの開拓者が今の経営に到達するまでには、たいへんな苦勞があった。

まずここは、満州開拓の経験者が多く、敗戦のため引揚げを余儀なくされた後、入植してきている。また、冬季の積雪は2～3 mにも達することがあり、現在もまだ通年除雪路線からはずれている。そのため牛乳は往復3時間近くもかけて、ソリで出荷しなければならない。牧草の刈り取りなどは、まだ人力に頼る部分が多いし、搾乳は一年中休みなしの仕事なので、家族ぐるみの重労働になっている。

しかし、そのためかえって世帯主が勤めに出たり出かせぎにいたりすることは少なく、農業の将来にも希望を持っている人が多い。

一方、山形県遊佐町にある小野會開拓地では、駅から30分という便利な所にあるために入植以来今までは離農者は少なかった。ところが現在では、世帯主が勤めに出たり、一年中出かせぎに行ってしまう、畑はかあちやん達だけでじゃがいもなどを作る家が多く、農業は振るわない。むしろ酒田などのベッドタウンのような性質を持ってきている。

南由利原のように、脱落者を多く出しながら、残った者が安定していくという場合と、小野會のように皆が兼業化してゆく場合のどちらが開拓の成功したといえるかは一概には言えない。それはこれからひとりひとりの農民が自立していくことができるかどうかにかかっている問題である。